説教20211224ルカ2：1-20「幸せのしるし」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今年のクリスマスは、闇の中で行われています。いや、クリスマスは毎年闇の中で始められるのです。このように、明かりを消して、周りの方々の顔もよく見えないような場所で、心を静めて、心を神様にむける時間が与えられますことは、なんと幸いなことでしょう。

なぜ冒頭に闇の話をしますかと言いますと、今年は、この社会の闇が一段と深まったのではないかと思われるからです。日本のあちこちで建物に火がつけられ、焼き尽くす火が人々を死へと追いやり、夜の暗闇は激しい炎によって照らされています。又、「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう」ということが実際に、ニュースで報道されています。

私たちは、どのようにして喜びと希望をもって新年を迎えることが出来るのでしょうか。私たちは、この世の中で、偽りの喜び、偽物の明るさに騙されてはいないでしょうか。社会が闇ですと、人々の一人一人の心の中にも闇が忍び込んできて、そのマインドは暗くなり、悪くなります。人の心に悪魔が入り込み、人々は、口々に「このやろう」といって怒りをあらわにし、「このやろう」が挨拶の代わりになってしまうのです。

暗い話はこのくらいにして、聖書の福音、喜びの話に戻りたいと思います。「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。」と記されています。イエス様が生まれたベツレヘムのこの馬小屋の中は真っ暗闇であったことでしょう。その闇の深さは、今の私たちを包むこの闇の比ではなかったことでしょう。一点の明かりも存在しない真っ暗闇、そこでは、マリアもヨセフも幼子イエス様も飼い葉おけも、まったく見分けることができず、全ては闇の中に横たわることでしょう。普通に考えれば。

しかし、この馬小屋は全体が照らされて明るいのです。それは物理的な明るさではなく、光の子イエス様が放つまことの光、そしてそれを受け取ることが出来るマリアの信仰心によるのです。「イエス様はこの世の闇を照らすまことの光」、このことは教会に来ればいつも耳にする当たり前のことです。そうして、今日は、その光を受け取るための私たちの側の備えについても語って参りましょう。

マリアの妊娠は社会的に見れば、望まれざる妊娠でした。それが知れたら人々に後ろ指をさされ、死刑にも処されるような不幸なことでありました。しかし、天使がマリアのところに来て「おめでとう、」と挨拶をしました。これをギリシャ語から直訳しますと、「カイレー、よろこびなさい、」なります。マリアは当然、何が喜ばしいのかと疑問に思ったことでしょう。そうして、天使がいうことには、あなたは神の子を宿している、という恐るべきそして信じがたい事実だったのです。でも、マリアはこの天使のお告げを素直に信じます。そうして、イエス様を信じ、「身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も／わたしを幸いな者と言うでしょう」と神を賛美しながら暮らし始めたのです。

この様に一人の人の中にイエス様が宿り、信仰を持って暮らし始める時、その人は光を放ち始めることでしょう。マリアの人々に対する挨拶は「カイレー、よろこびなさい、」という言葉になりました。当時のイスラエルの社会も闇に包まれて暗かったのですが、またそれゆえに、マリアの「カイレー、よろこびなさい、」という挨拶は、それだけで周りの人々を明るくしたのではないでしょうか。

この様に、この飼い葉おけに寝かされたイエス様は、周りにいるマリアたちの信仰心と応答することによって、その光を暗闇の中に、際限なく広げることが出来たのでしょう。

そのイエス様からの光は夜通し野宿して、羊たちの番をしていた羊飼いたちにも届けられました。この羊飼いたちもまた当時の社会の闇の中で、暗い生活を送っていたのです。そこに主の栄光の光が差し込んで、周りを明るく照らしたのです。羊飼いたちは恐れた、と記されています。ここには羊飼いたちの戸惑いが感じ取れます。羊飼いたちは、この主なる神からの明るさを、素直に喜びのしるしとしては受け取れなかったのでしょう。突然こんなに明るく照らし出された私たちはこれからどうなる？という戸惑いと不安が彼らのうちにはあったことでしょう。

天使は告げます。布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子イエス様が、あなた方の救い主であり、あなた方の喜びの印であると。このお告げを聞いて羊飼いたちはとにかくその目で、救い主イエス様にお目にかかりたくなったのでした。

私たちは、何かよくわからないけれど、なんだか喜ばしいことが進展しているような場所に身を置きたいと思って、その場所に引きつけられるといったことがあると思います。そして羊飼いたちは、民全体に与えられる大きな喜びというこの上ない喜びによって、この馬小屋へと誘われたのであります。

さて、この時のイエス様の誕生の喜びは、今でいう、一つのご家庭に赤ちゃんが生まれたという程度の喜びにとどまることではありません。こんな風に言うと、かけがえのない赤ちゃんの誕生を軽く見ている、と言って非難されるかも知れませんが、もちろん一人一人の赤ちゃんの誕生も喜びに満ちたことであります。しかし、イエス様の誕生は明らかにレベルの違う喜びを指し示しています。聖書はイエス様の誕生を民全体に与えられる大きな喜びだと言っています。イエス様の誕生は、民全体に与えられる大きな喜びの印だと言っています。それは、イエス様が私たちのまことの統治者であり、まことの王であり、まことの救い主であるからです。むしろ私たちは、このイエス様の誕生にあやかる方が、一人一人の赤ちゃんの誕生についても、その喜びは深められるのではないでしょうか。

私たちは、天使が言う、あなた方へのしるし、という印という言葉に注意しましょう。「しるし」というのは、人々に指し示すもの、シンボル、象徴などの意味があります。私たちはシンボルに弱いです。なぜならシンボルは、まだ実現していない将来や、隠された意味や、心に秘められた思いなどを、あからさまに周りに指し示すからです。この闇の社会の中で、まだ私たちの救いは実現していないけれども、この飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子イエス様こそその表れ、シンボルであると、天使は羊飼いたちに告げたのです。なぜこの社会で無力な幼子が、私たちの救い主になるのでしょうか？

それは幼子が怒りを知らないからなのではないでしょうか。かのダビデ王は、人の怒りを鎮めるのは、町を鎮めて支配することよりも難しい事ではあるが、人の怒りを鎮めることこそ、まことの支配であると言いました。大人というのはその心の底に何かしらの怒りを秘めている者です。闇の社会に身を置いて、大人は怒り憤ります。しかし、幼子は闇の中で、泣くことはあるでしょうが、怒ることはありません。主なる神は、そのように怒ることを知らない幼子を、まことの統治者として、この世に送ってくださったのでした。

マリアは、そのような救い主イエスを信じ、自分の中にお迎えして、イエス様が十字架につかれる時に至るまで、イエス様と共に歩んだのです。

私たちは、怒ることを知らないイエス様をまことの救い主として、最後まで信じることが出来るでしょうか。闇の中で自分の心が怒り狂う時、憐み深い救い主イエス様に、身を委ねることが出来る人は幸いです。

私たちは、この世で、多くの偽りのしるしに惑わされ、救いの道からそれてしまいます。詩編74編に興味深い歌が記されています。「あなたに刃向かう者は、至聖所の中でほえ猛り／自分たちのしるしをしるしとして立てました。」人間が造りだしたしるしは、人間を最後まで癒すことはありません。人間が造りだしたしるしには限度があり、有効期限があるのです。そうしてそのようなしるしを目指して歩むものはやがて、こんなはずではなかったと言って、歯ぎしりして怒りをあらわにすることになるでしょう。

私たちに与えられた真の救いのしるしとはイエス様であります。飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子イエス様、そして十字架に掛けられているイエス様、こそ私たちのまことの救い主です。なぜなら、そのイエス様こそ、復活されて、目には見えませんが、今、私たちと共に歩み、信じる者の心のうちに最後まで住んで下さる憐みの救い主だからです。

このクリスマスの時に、この暗闇の中で、私たちはイエス様を信じる信仰の喜びを静かに味わってまいりたいと願います。